

「守る側として」

群馬県渋川市立伊香保中学校 三年 齋藤 茜里^{さいとう あかり}

土砂災害。それは大雨や地震によって地盤がゆるみ、土砂などがなだれ落ちてきて起こる災害のこと。時に人の命をも奪う、恐ろしいものです。

そして今夏、多発する台風による土砂災害のニュースをテレビでよく目にしました。土砂災害警戒区域に指定されて、避難する人や、土砂が家屋に流れ込み被害に合ってしまった方の映像を見て、私はある一つの事を思い出しました。それは去年の今頃に起こった、広島県広島市での大規模土砂災害のことです。

これは、広島市で去年の八月二十日午前二時から二時間にかけて見舞われた集中豪雨により、大規模な被害と多くの犠牲者をうんだ災害でした。私は、「救助に行った消防隊員の方まで巻き込まれた」というニュースや、行方の分からない家族を探し続ける方のニュースに、大きな衝撃とやりきれなさを感じていたため、よく覚えています。

私はその時、こう思いました。「亡くなってしまった方の命を無駄にせず、教訓に生かしてほしい。」と。では、今、広島市では何か変化はあるのか、と思い調べてみました。すると、警察署と本部でいち早く現場の状況を共有できるようにするための訓練が行われていたことを知りました。もちろん、去年のような大雨による大規模な土砂災害を想定して。

一年前のことが風化されずに人々の心に残り、教訓として生かされていることを知り、とても嬉しく思い、その消防の方々の気持ちを思うと、とても温かい気持ちになりました。と同時に、そんな方々の努力や、「命を無駄にせず教訓に生かす」という思いから私たちの安全がつけられ、守られていくのだと、改めて思いました。

また、私の父も消防士ではありませんが、防災に関する仕事をしています。この仕事は、どこかの地域で何らかの警報が発令された場合、対応しに行かなければなりません。実際、大雨の時に「ちょっと行ってくる。」と、家を出て行く父を何度か見かけたことがあります。

そんなある日のことです。家族の間で、父の仕事の話になりました。その中で父は、「もしも、この家に被害の出るような災害があっても、俺は家にはいられないんだ。」と言いました。私はその時はあまり重く考えずに、「大丈夫、大丈夫。いざとなったら、私とお姉ちゃんがいるもん。平気だよ。」と言いました。ですが今、改めて考えてみると、それがどれだけ重大なことかということに気付きました。もし、この辺りに災害が発生すればきっと慌てて、冷静な判断ができなくなっているかもしれません。そんな中で、大黒柱である父がいないのです。祖母や母よりも力があるとはいえ、私に何ができるのか。

私はこの時思いました。「私はもう中学生なんだ。言われた通りに動くのではない。自分から行動するのだ。」と。そして、「災害が発生したら、私が家族の、地域の安全を父や他の方々と一緒に守っていく」と決めました。もちろん一人ではなく姉や地域の方と協力して。

災害発生時は、きっと大きな混乱が起こるはずですが、また、土砂は流れる速さが速いため、助けを待っていたら逃げ遅れてしまいます。そしてその土砂が道を防いでしまったら、消防車などによる救援活動も行えません。では、そんな時、どうするのか。それは、私たちの世代が行動を起こさなければいけないのではないのでしょうか。

消防士の方や、役場で働く方の人数は、住民の数より少ないです。災害時に、お年寄りの方や、障害のある方一人一人に対応しては間に合いません。ですが私たち中学生、高校生が一人にでも多く声をかけていけばより迅速な対応ができるはずです。

私たちの安全は、多くの方の支えの上に成り立っています。一人でも多くの方の命を救えるようにという訓練や、災害時の人々の不安を取り除いたり、状況を把握する父のような仕事。たくさんもの守られています。ですがいつまでもそのままではいけません。一家の、町の一員として守られる側から守る側に変わっていかなければなりません。

どこが危険で、どこが安全なのか。避難場所はどこか。もう一度確認してみようと思います。安全を、命を守っていく側として。